別　紙

国語科の学習指導要領および教科書における
語彙指導に関する調査研究

◎宮本　淳子　（東京学芸大学日本語・日本文学研究講座）
○白勢　彩子　（東京学芸大学日本語・日本文学研究講座）
中村 和弘　（東京学芸大学教職大学院）
土屋 晴裕　（東京学芸大学附属大泉小学校）
堀口 史哲　（立教女学院小学校）
代表者連絡先：https://forms.gle/YUpWQyzm14c1L6Lb9

【キーワード】日本語学、国語教育、語彙、語種

1　はじめに

小学校学習指導要領(平成 29 年度)では、学習の基盤となる資質・能力が見直され、知識及び技能、思考力・判断力・表現力、学びに向かう力・人間性の 3 つにより再構築された。これに伴い、国語科の学習指導要領も整理され、言語的知識に関わる事項、とりわけ「語彙力」に関わる事項が強化された。例えば、学習指導要領では以下のように記載されている。

> 語彙を豊かにするとは、自分の語彙を量と質の両面から充実させることである。具体的には、意味を理解している語句の数を増やすだけでなく、話や文章の中で使いこなせる語句を増やすとともに、語句と語句との関係、語句の構成や変化などへの理解を通して、語句の意味や使い方に対する認識を深め、語彙の質を高めることである。(学習指導要領　第 1 章総説 p.8)

ここで、特筆されるのは、小学校国語科で目指されている「語彙力」とは、語彙の量のみならず、語彙の質の充実、語形成に関わる事項の理解を意味している点である。具体的には、語構成、語句と語句との関係、語の出自といった事項への理解を深めることが求められている。

従来の研究でも、語彙の獲得プロセスに関しては盛んに扱われ、例えば、児童が個別具体的経験を通じ、概念的語彙を獲得するところに始まり、徐々に一般的、抽象的語彙を獲得していくことが指摘されている。すなわち、語彙学習には「段階」があり、概念的、意味的理解から表象的理解、さらには「記号」としての語の理解へと展開していくこと、三者が徐々に結びつけられていくといった事項は解明され、そうした知見が国語科の指導でも取り入れられている。

しかしながら、語彙獲得の発達プロセスに関わる知見が全て反映できているわけではない。例えば、児童の語彙獲得のうえで重要な役割を果たしている要素の１つに「聴覚的情報」が挙げられるが、国語科の語彙学習では、研究の知見が十分活かされているとは言い難い。言い換えれば、児童は、日常生活において耳にする周囲の会話、大人や、他児童の使用する語彙、メディアからの音声言語情報に触れ、いわば、「偶発的」に学習を進めていると言える。

本プロジェクトメンバーは、前年度までに音声言語の指導に関する実践研究を実施し、語彙学習に関しても課題を見出し、「聴覚的情報」からのアプローチの可能性を指摘してきた。令和 5 年、改めてチームとして発足し、新たな観点から研究を推進するに至る。

２　本プロジェクトの目的

本プロジェクトの目的は、①日本語学、国語教育の立場から小学校国語科の、語構成、語形成学習事項、単元を見直すこと、②両領域を有機的に結びつけていくための指導法を提唱することにある。特に、前年度までに見出された課題、「聴覚的情報」からのアプローチの可能性をふまえ、学童期の語彙学習のあり方を問い直す。

３　本プロジェクトの実施概要

本プロジェクトでは、上記のような課題意識のもと、2 年にわたり調査、検討を実施してきた。初年度はまず、小学校の教科書を用いた記述内容の検証を中心に行い、2 年目は、初年度の基盤研究にて見出された課題や、学童期の認知プロセス上の課題の検証、教材開発（カード作成）を行った。以下、検討対象と実施手順について「継続申請書」より一部引用する。

令和 5 年度(2023 年度)

1 年目は、以上の課題を明らかにすべく、日本語学及び国語教育の立場から、国語教科書の内容を主に以下の観点から検討し、領域ごとの対応関係を検証した。

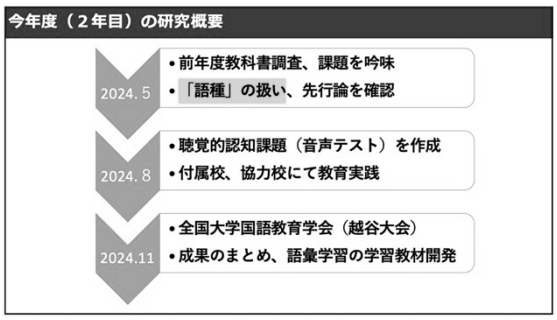
① 語彙の領域がどの程度を占めているか。
② 語彙と音声など複数の領域と重なり合う単元がどの程度を占めているか。
③ 語彙指導のうえで記述に不十分な点がないか、その場合どう改善できるか。
④ 教科書間でどのようなアプローチの差異が見られるのか。

本プロジェクトでは、特に、教科書における語彙と音声に関連する領域が関わる単元を検証、新たな観点からの指導法を検討、土屋晴裕氏（附属大泉小学校教諭・現在付属世田谷小学校教諭)、堀口史哲氏（立教女学院小学校教諭）に授業実施を依頼し、その後、実践内容を踏まえた研究成果を全国大学国語教育学会（信州大会）にて発表した。

令和 6 年度(2024 年度)

次年度は、認知心理学の研究を参照し、聴覚的提示の際の認知プロセスを分析した。これは、「語種」指導の検討に先立ち、認知過程の見直しを要するためである。そもそも語種を含む語彙の特性に関わる情報はどのように認知されているのだろうか。以下の手順で実施した。

① 日本語学、国語教育、認知心理学に見る「語種」の扱い、先行論を確認した。
② 「語種」及び「仮名」の認知過程を把握すべく、聴覚的認知課題を作成した。
③ 土屋晴裕氏、堀口史哲氏、西宮玲子氏に協力いただき、聴覚的認知課題を実施した。
④ 親密度や音素配列の影響を検討し、全国大学国語教育学会（越谷大会）にて発表した。
⑤ 得られた課題を継続的に考察するとともにアンケート調査を実施、補足調査を実施した。



（スライド１・２:『令和 6 年度学習指導要領、幼稚園教育要領及び教科書に関する研究プロジェクト　国語科の学習指導要領および教科書における語彙指導に関する調査研究報告書』3･4 頁　報告発表会資料より引用。注１参照）

４　本プロジェクトの成果と課題

４．１　令和５年度の実践成果

実践の詳細は『令和６年度学習指導要領、幼稚園教育要領及び教科書に関する研究プロジェクト　国語科の学習指導要領および教科書における語彙指導に関する調査研究報告書』（注１）をご参照いただくとして、以下、成果の概要を記すこととする。

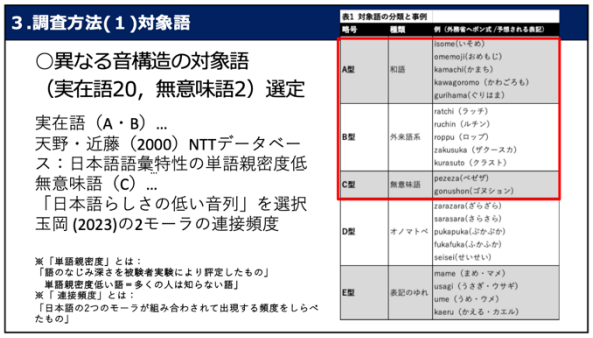
時間	主な授業内容
第一次	教科書を読み、漢字二文字の言葉に関する問題を解きながら、つながり方を考える。（１時間） ○「坂道」などの言葉を例に、二つの漢字がどのように組み合わさっているかを考える。 ○「田畑」などの言葉を例に、意味に関係のある言葉を組み合わせた型について考える。 ○「軽重」などの言葉を例に、反対の意味になる言葉を組み合わせた型について考える。 ○「川岸」や「白酒」という言葉を例に、二つの言葉が重なると、もとの言葉の読み方が変わる（連濁する）方について考える。
第二次	前時で学習した「川岸」や「白酒」という連濁する事例から、訓読みの漢字同士の組み合わせにも関わらず、連濁しない熟語を探す遊びをする。（１時間・**本時**） ○国語辞典を自由に使って、「訓読み同士が組み合わさった２字熟語にも関わらず、連濁しないもの」をたくさん探すゲームをする。 ○漢字二文字の言葉を比較することで、「訓読み同士なのに連濁しない時の規則」を考える。

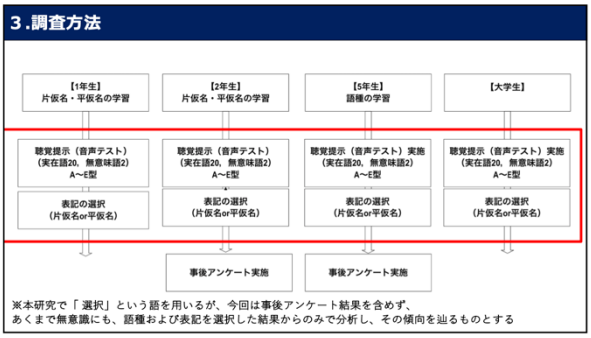
（表：『令和６年度学習指導要領、幼稚園教育要領及び教科書に関する研究プロジェクト　国語科の学習指導要領および教科書における語彙指導に関する調査研究報告書』堀口史哲氏の実践報告 36 頁より引用。注１参照）

従来、学童期は言語発達のプロセスの転換点、質的変化が見られる時期であるとの指摘はあるものの、その詳細は不明であった。初年度の実践からは、学年を問わず、児童の、語構成に対する理解が深まる様子が見られた。また、語形成に伴う音変化に対する気づきを得ている様子も窺えた。児童の中には、自身で推定した言語の法則性をもとに、音読を試みる児童も一定数存し、語を客観的に認識している様子が看取された。声に出すという再生行為は、聴覚からのアプローチでもある。漢語複合語や和語複合語の構成要素、音訓、さらには音韻的特徴へと意識が向けられていた点は、本プロジェクトの一成果とも言える。

４．２　令和６年度実践と成果

続いて、令和６年度であるが、前年度の成果を踏まえ、「語種」に焦点を当て分析してきた。「語種」は、熟語の形成、語形成に関わり、語を増やしていくうえで重要な背景知識である。児童は、語種ごとの特性情報を聞き取り、脳内で情報の対応づけをし、処理していることが予想されるが、従来の研究では、学童期の児童がどのように認知し、対応づけているのか、その過程に関しては、十分に議論がなされていない。





（スライド３・４：越谷大会当日発表用資料のスライドの一部より引用。注３参照。）

そこで、本プロジェクトでは、学童期の児童が、聴覚的提示の際、どのように語種を選択するか、単語親密度の低い語を聞き取り、平仮名と片仮名のどちらを選択するのか検討がなされた。詳細は、全国大学国語教育学会要旨集「学童期児童における語種・表記選択の実態とその背景―音声テストの分析を通じて―」を参照されたい（注２）。主な結果は以下の通りである。

・連濁やマ行音を含む語群では、平仮名選択率が多く認められた。
・ラ行音や濁音、促音を含む語群では、片仮名選択率が多くを占めた。

日本語に低頻度な音素配列の語の中のうち、特にラ行音や濁音、促音を含む聴覚情報から、児童がある種、優先的に「片仮名」を選択する様子が確認された。
認知言語学の先行論によれば、人間は、系統的に学習したことがない言語であっても個々の言語に特徴的な情報を聴覚的に知覚することができるとされている。本稿の調査を経て、学童期の児童もまた、未知の単語を聞き取る中で、韻律的特徴のみならず、音素配列や、先頭音など、日本語の音韻的特徴を捉えていることが明らかとなった。
また、音韻的特徴の把握、表記の選択や語種の判別を瞬時に行っている様子も確認できた。児童の未知の単語を聞き取るプロセスを、指導上、どのように活用するかが今後の課題となる。

４．３　今後の課題

以上、この２年間で、語彙と音声・音韻領域に関わる事項を中心に分析を行い、課題解決の方向性を探ってきた。特に語種をはじめとする語の認知プロセス、無意識にも作用する聴覚的情報の特性、表記選択の傾向は、学習材のあり方や学習順序に関わる重要な問題を孕んでいる。児童がどのように表記や語種の判別と結びつけているかについては、さらに慎重に検討していく必要がある。今後の課題としたい。

主要参考文献

伊藤たかね・杉岡洋子『語のしくみと語形成』研究社　2002 年
廣田栄子『聴覚障害のある子どもの理解と支援』　学苑社　2021 年
（注１）『令和６年度学習指導要領、幼稚園教育要領及び教科書に関する研究プロジェクト　国語科の学習指導要領および教科書における語彙指導に関する調査研究報告書』
(https://u-gakugei.repo.nii.ac.jp/search?page=1&size=20&sort=custom_sort&search_type=2&q=257)
（注２）全国大学国語教育学会要旨集「学童期児童における語種・表記選択の実態とその背景―音声テストの分析を通じて―（https://www.jstage.jst.go.jp/article/jtsjs/147/0/147_123/_article/-char/ja)
（注３）宮本淳子・白勢彩子・中村和弘・土屋晴裕・堀口史哲（2024)「学童期児童における語種・表記選択の実態とその背景 ―音声テストの分析を通じて― 」(第 147 回全国大学国語教育学会越谷大会）当日資料